

東京の温泉 黒湯を東京ブランドに！

森記念財団研究員
脇本敬治

黒湯という言葉聞いたことがあるだろうか。黒湯は大田区を中心に、品川区、世田谷区などに多い温泉である。コーラのような真っ黒なお湯。初めて見た人は驚くと思うが、黒湯の正体は、太古の植物が水に溶け込んだ植物由来の温泉とのこと。黒い温泉は世界でも珍しいが、東京では多摩川がはるか昔に運んだ植物層が源泉になり、城南地域で多くの銭湯・温泉として利用されている。

温泉のイメージは草津や伊香保のように大きな温泉街、あるいは人里離れた大自然の中にたたずむ温泉宿や露天風呂といったものだろう。そのため東京の温泉といっても、ピンとこない人が多いと思う。しかしながら、東京は黒湯をはじめとする温泉の数が、非常に多い都市なのである。

黒湯の性質は汲み上げる源泉によって異なるので、銭湯や施設によって、それぞれ微妙に違いがある。色は琥珀色から、10cm下の自分の手が見えなくなるほどの濃い黒色まで。お湯の具合も、つるつとした感じのものから、ぬるつとした濃いものまでである。

江戸っ子は熱いお湯を好んできたので、東京の銭湯は温度が高いことが多いが、黒湯の場合は肌を刺すような熱さとならない。湯に浸かると、すべすべして肌にやさしい感じがする。湯の豊富な各種ミネラル分がお肌に良いようで、冬でも湯上りに肌がつっぱるような感じはしない。「美肌の湯」と謳っている温泉もある。また、寒いこの時期にうれしいのは、黒湯は湯冷めしにくく、足や手が長い時間ポカポカと温かいことである。続けて入浴することで、冷え性が改善するとも言われている。

現在では内風呂が多く普及しているため、廃業する銭湯が多く、黒湯の銭湯もまた少くである。しかし、黒湯を手軽な都市型温泉として、東京のブランドにできないだろうか。「お肌がきれいになり、冷え性にも良い 東京温泉 黒湯」は、とても魅力的な気がする。人によっては近くに美味しいビールを飲ませる居酒屋があると、さらに魅力を感じるかもしれない。